

志の開拓者

【命の源流(2)】

今年の「お盆」は気候も良く、お檀家の皆様におかれましては、亡きご先祖様を敬慕(けいぼ)の心持ちで「おもてなし」させて頂くことが出来たのではないのでしょうか。また今月は、「お彼岸」という日本独自の行事が用意されています。

「お彼岸」の一週間もやはり、自分自身を省みる「心の洗濯週間」とも言うべき過ごし方が定められております。中日にはご先祖様に感謝の念を捧げ、前後六日間は、悟りの境地に達するために必要な六つの徳目、「六波羅蜜(ろくはらみつ)」

※布施 持戒 忍辱 精進 禪定 智慧
を一日に一つずつ修める日とされています。

つまり、「お盆」や「お彼岸」に共通するものは、ご先祖様あつての私達であるということとを踏まえて、自らの命の源流を省みる大切な行事であるとも言えます。

平素は遠く離れた家族が一堂に会して、同じ血縁に想いを馳せる時、初めて、切っても切れない絆を実感

することが出来るのではないのでしょうか？

「家族」というのは血肉を同じくすると同時に、言わば自分にとっての一番小さな「社会」とも言えます。その家族という小社会で互いに認め合い、支え合う気持ちを備えていなければ、親兄弟といえども争いが絶えないでしょう。ましてや現代は核家族。こういう時代だからこそ、命の源流、ご先祖様に還らなければならぬ必要性があるものと思います。

【市民とは？志を持つこと】

ローマ時代「市民」とは…《志を共にする者》の事を表していたようです。そこで、志を共にする者同志、どうしたら本物の市民たりうるか？これが「市民」としての共通のテーマとなっていた様なのです。

市民としての共通のテーマ、皆様はどう思われますか？様々な答えが出てくるとは思いますが、私はこう考えます：『他人のせいばかりにしないで、私達一人ひとりが自分でやれることは何かを考え、自分が為せる精一杯のことを行う。それも損得勘定ではなく、人間として正しい事なのか、はたまた間違っていないか？自分の言動が人を

傷つけていないか？独り善がりではないか？それを冷静に受け止め判断し行動する。』これが市民共通のテーマなのではないか？それしか無いのではないか？そう思います。

つまり、「志」を持つとは「市民」、それも「本物の市民」になるということ。その志とは、「自分がやるべき事、やれることを一所懸命やる」という事です。一人勝手に行動するという事ではなく、お互いに自立した人間が、どうしたら一緒に生きていけるか、手を繋げるかが市民社会を生きる私達の本日のテーマだろうと思います。

私達の社会は、色々な場面で極めて世間を気にしながら生きています。つまり、世間はどう見られているか？その中で一番気になる事は恐らく、恥をかきたくないということではないかと思えます。だとすれば、恥をかいてはいけないという事がプレッシャーになっていく。すると、何事も自分で決められず、生き方が他律的になってしまします。そうなることからネグレクトや虐待、イジメに引き籠もり等、現代社会に巣くう問題に陥ってしまう可能性があります。

【日本人は世界一志の高い民族】

事を成す為には目標を立てることが一つの要素になってくるでしょう。日本は製造業で世界一の発想と技術を持っていると思います。目標と志には、非常に密接な関係があります。農民的な価値観、つまり保守的な考え方や物作りといったものが世界に残っている民族と言えるでしょう。なぜ残っているのか？日本は島国で、長い歴史の中でも外からあまり攻められません。その為、他の異文化と競争、喧嘩をする必要がありませんでした。だから昔々の価値観や家庭的、村的集団主義がそのまま残っています。そして、そういう価値観を洗練発展させ、ルールを付け加え、義理人情や建前と本音の島国文化を作り上げてきたと言えるでしょう。そしてそれが今も続いています。

日本の大学は積極的に講義を行わないように感じます。要は積極的に勉強する学生がいらないとも言えます。学生にやる気が無ければ先生も積極性を失ってしまいます。ではなぜ学生は勉強に積極性がないのか？その原因は明らかに学歴社会にあると思

います。自分の将来の全てを十八歳の時の一つの試験で決められてしまう。入試問題の研究と暗記だけの勉強をして、偏差値に合う大学へ入る。

その時点で将来を決められてしまう。つまり企業は人を採用する時、この学生は大学で四年間どの様に勉強したかという実績は見ず、学校の名前だけを見てみると聞いた事があります。いわゆる学名社会や学歴社会です。日本の学生は精神的には弱い様に感じます。

人によりますが、大半の日本人は周りの環境や雰囲気の影響されやすい民族です。学名社会や学歴社会という制度に縛られた学生生徒からは、遅(たくま)しい人間、創造性のある人間は育ちにくいのです。反面、生まれてくるのは要領の良い人間ばかりです。日本の学生は、授業中に質問しないというのが世界の常識になっっています。私語よりも怖いのは無言です。外国と違ってしている創造性の基盤は知識です。とは言え、知識が無ければ何も出来ません。日本の子供はずっと箱の中で育てられているようなものです。挙げ句、箱の中には、意味不明なテレビ番組や漫画な

ど：だから道徳が崩れてしまう。視野を広げなければなりません。視野が広がれば創造性も湧いてきます。

【時代の転換期】

情報というのは基本的に第三者から受けるものです。情報が有り過ぎると「見えない世界を見る力」が、形成されにくいと思います。創造力にはそこから発せられるリズムがあります。そのリズムと共振して新たなものをつくっていく。

時代の転換期というのは、主役が脇役になり、脇役が主役になる、そういうもの様です。今の時代は、片方には閉塞感というのがありますが、もう一方には我々が本当に何かできるというチャンスがある様に思います。ピンチはチャンスという事でしよう。「志」というのは、もっと身近なことで自分が何をやりたいかを、地域の人々、自分の足元から一つ一つ見つけて、仲間とチャレンジしたらいいのではないかと思えます。

【支え合いの社会を生きる】

取り留めのない話をしてきましたが、紙幅の関係上そろそろまとめに入ります。

人間社会の中で、一市民としての責任

を全うする事について、「個人個人が大きな志を持つて、互いに尊重し合い、支え合いの社会を構築することを目指す」という事になりましょうか。そういった中で、最も基本的であり、また最重要ポイントに位置づけられるのが、親をはじめとするご先祖様への敬慕の念を深め、常々自ら命の源流に立ち返る事ではないかと確信致します。大きな社会の中の一人、家族という小社会の中の一人、そして個人の命も源流を辿ると、無量大数のご先祖様の命のバトンを、志の深さと共に受け渡されている稀有な命である事に気が付きませす。その意味で、自分個人の命も、ただ単に自分一人だけの命ではありません。だから命を粗末に出来ないし、命が大切なのです。

その命の源流に還る「お彼岸」は九月二十三日を中日として一週間です。「お中日」には真成寺の本堂で、互いに命の源流を辿りましょう。

ちなみに、「ご先祖様や親を想う時「敬慕」ではまだまだ足りなく、理想は「恋慕(れんぼ)」だと思えます。「敬慕」は敬い慕うことで素晴らしい心持ちなのですが、一方の「恋慕」は『恋い慕う』と読みます。(恋は盲目)と

言う様に、「恋い」という事は、自分自身のこと以上に、何時も常に相手へ思い巡らす心情を表します。さあ、気持ちも新たに「お彼岸」を迎えましょう。

合掌 副住職 谷川寛敬

